

---

コース名：マスターコンソールなんかこわくない

(平野井ちえ子)

---

対 象：中学・高校・大学の語学教師

---

目 標：LL/CALL教室の有効活用

---

研修期間：1日

---

研修内容（研修方法）：

第1部：Native World Pro （初級会話のCALL教材）

第2部：一人ずつ前に出て、マスターコンソールから他の参加者の体験学習をモニターする。

インカムまたはオールコールで学習者に話しかける。

第3部：受講者登録の仕方・成績管理システムについて学ぶ。コールで学習に話しかける。

---

ラショナルール：

提案者が担当しているクラスで毎年度行っているLL授業に関するアンケートによると、LL教室で授業を受けた経験はあるものの、それが実際にヘッドセットを活用したコミュニケーションの授業であったという学生数は少ない。その原因に、教員のマスターコンソールアレルギーがあるのではないかと「ヘッドセットなんかつけて話すのは、本物のコミュニケーションとは程遠いのだ。」といわれるかもしれない。そんなことはわかっている。だったら、LL/CALL教室なんか造らなきゃいい。「今更、文部省の提案がこの程度？」と軽蔑されるかもしれない。それでも、現場で消化できる見込みも無い最先端技術の紹介に終わるより、よっぽどマシではないのか？まやかしのLL授業に幻滅する学生をへらしたいものである。

---

備 考：

マスターコンソールアレルギー対策の研修方法がなぜCALLかというと、LLよりもCALLの方が、パソコン画面という視覚メディアと音声の両方を介在するので、初心者の先生でもモニターしている学生の学習状況を把握しやすいからである。また、最初は既成のCALL教材を使えば、学生は基本的に教材そのものに没頭しているので、教師は、ゆっくりモニターして、ゆっくりコメントを考える余裕ができる。また、マスターコンソールは、パソコン画面式のものよりパネル式の方が良い。パネル式の方が、初心者の先生にとって、CALLシステム全体を系統的に把握しやすいからである。なお、研修教材のNative World Pro については、拙稿「Native World Proを用いたCALL授業」（法政大学人間環境論集台号）を参照のこと。

---